

なぜ、行書、草書か

書の勉強は多岐にわたり、書について知識を広め、理解を深めることも大切ですが、やはり、筆を執って習うことが中心になります。そして、その練習内容を整理すると、筆づかいと形のとり方と並べ方の三者になります。それと墨の使い方も忘れてはなりません。楷書は構造が明快ですから、こうしたことを順序立てて理解するのに便利な書体だと思います。それで、書の練習は、まず楷書から、ということになるのですが、私は初めて書を習

日書を学ぶ人の基本要件だと思います。そのためには行書から入ったほうが効果的で、他の書体にも移りやすいと思うのです。

動きと形の他に、書美を考える目安として、「変化」と「統一」があります。この四者を基準にして、漢字各体の特徴を考えてみると、今回取り上げる行書と草書は、形より動きに、統一より変化に重点があると思います。最近の書を学ぶ人たちは、どちらかといえば、心の遊びとして、自己表現として書を考えているのではないのでしょうか。こうした立場からすれば、行書・草書は、まことにもしろい

意蘊によって海はされ、残されてきたものが古典といわれる書跡群です。書を学ぶために、手本としての古典は欠かせないものです。

今回の講座では、古典の臨書を中心に据えました。ただ、放送回数やテキストのページ数には限りがあり、紹介できるのはごく一部です。最近では専門店へ行けばずいぶんたくさん古典の複製が見られるようになりました。その中からあなたが一番好ましいと思う書や古典を探してください。何点か選んだ後、さらに厳しい選択を繰り返して、最後の一点に絞り込んでしまってください。それはおそらくあなたの個性に最も近い先人の筆跡と比べてよいと思います。この古典のどの部分が良いのか、どこが好きなのか、というところまで、自身で考え、厳密に観察します。この古典を学びます。書き写しもよし、かこ字を作って、筆で中を埋めるもよし、臨書もよしです。丁寧に、厳密に学ぶことは、先人の書きぶりを追体験する貴重な勉強です。この結果、やがてあなたらしい個性の書が生まれてきます。こうした経験を重ねていくと、培われた技術が鑑賞眼を養い、鑑賞する眼は技術をリードし、書の世界は一層広まります。一枚の絵も、自然の風景も、創作への意欲を触発してくれるようになります。真に個性的な書作品の誕生です。

書の勉強はまず「好きな書を選ぶ」ここから始めてください。

書に個性を

う人に、行書から始めることを勧めています。それには次のような理由があります。

今日では毛筆を使うことが少ないので、書を学ぶ人は、まず、筆の柔らかさに慣れる必要があります。それから、書的美しさは、でき上がった形と、筆の動きの両者から成り立っており、相互に因果関係を持ちながら書美を支えています。ところが初学者は「形」ばかりにこだわって、「動き」は「形」をマスターしてからと考えている人が多いようです。毛筆の柔らかさに慣れ、「形」と「動き」を同時に捉え、特に「動き」を重視することは、今

書体だと思います。もちろん、形を整え、統一を考えることも大切です。この方面にも十分気を配ることによって、一層立派な行書や草書が書けることになるわけです。

自分の好きな古典を学ぶ

「用あるものは全て過去にある」ということばがあります。書も同じです。現在、それが残っているにせよ、失われているにせよ、私たちが学ぼうと思っている書の一切は過去に生まれていたと考えることができます。その中から、長い時間と各時代の多くの人々の鋭い美

行書・草書の魅力



漢字の書体

上のように、漢字の各書体を並べてみると、ずいぶん違っていますが、実際にはある時、急に新しい書体が生まれたわけではありません。共通の符号としての用を果たしながら、簡化と美化が少しずつ進められたのです。そして、一定段階に達すると、文化の担い手として磨きかけられ、その時代を代表する正式書体が誕生します。その頃にはすでに、速写用の実用略式体もできています。さらに時代が進むと、略式体が正式書体になり、その下にまた、略式体が生まれます。

具体的に説明しましょう。篆書は漢字最古の書体です。秦時代になって、正式書体である小篆が生まれるまで、千年以上の歴史があります。秦代にはすでに実用略式体として隸書がありました。隸書は漢代に入って正式書体として磨きかけられ、八分隸はつぶんれいが生まれます。その頃すでに略式体である草書ができています。漢に続く三国と西晋時代は書体の混乱期だったようです。正式書体は依然として八分隸でしたが、略式体にはいろいろあった

書

道

楷書

書

道

行書

書

道

草書

書

道

篆書

書

道

隸書

ようです。やがて東晋時代になって、八分隸に代る正式書体の楷書が形を整えます。そして、略式体として、行書が生まれます。行書は楷書の明確さと草書の簡便さを取り入れた書体です。草書は前代からありましたが、漢代のものとは気分が異なっています。
正式体と略式体に分けて考えると、行書と草書は共に略式体で、書体としては裏方であ

2
行書

行書の書法①筆の速度

一一一人人人

三心吉里空

松門高重遠

行書の利点と書き方

初学者は役に立たぬばかりでなく、逆に障害になる先入観を多く持っているものです。例えば、力を入れるとか、心をこめて書くとかいったことは、次元が高すぎて、実際にどうしてよいか分らないものです。そうしたことは忘れてしまつて、まず、毛筆の柔らかさに慣れ、自由自在に筆が使えるようになることが大切です。そのための入門書体としては行書が最適で、他の書体に移りやすい利点もあります。

- 「一」起筆、連筆、収筆での時間のかけ方が違います。楷書は4、2、4程でハキハキと書き、行書は2、2、2くらいで、下した筆は直ぐ運び、止めたら間をおかず離します。
- 筆の運びで点画の形が変わります(人)。
- 点画のつながる部分ができます(三、心、吉、里、空)。
- いろいろな省略は、松以下を見てください。
- いろいろなくずし方を上にあげておきます。

行書は日常生活に最も多く使われる書体です。速く書くことができ、しかも読みやすいという特徴があります。書体は楷書に近いものから、草書に近いものまで幅広くあります。楷書に比べて、運筆の緩急、抑揚がはっきりし、筆路が明確です。

永の字を比べてみると、行書の特徴がよく理解できます。①の永字は、二画目の縦画への移行に丸みを見せ、また左払いは次の画へ移るための筆路がはっきり表れています。②の永字は、全体を流れるような運筆で、字形も変化しています。特に、右払いは左へ払うように終わっています。

点画に柔らかみが出る。

大 山 之

点画が連続したり、省略されたりする。

白 然 林

筆順が変わる場合がある。

花 安 神

① 行書



② 行書

楷書

永

永

草書

永

③ 行書

練習

行書の用筆・運筆法の練習をしましょう。

春

秋

風 風
月 月